

## 本誌とともに過ごした 年月に寄せて

浅井 俊弥

医師としての進路は、ときに思いがけない出会いによって形づくられる。私にとってその出会いは、1冊の雑誌であった。医学部5年生のころ、皮膚科のポリクリで訪れた研修病院の皮膚科外来で、ふと手にとった『皮膚病診療』の誌面内容に触れた瞬間、皮膚科学という領域の奥深さと臨床の魅力に強く惹かれたことをいまでも覚えている。臨床に寄り添う言葉、患者をみつめる静かなまなざし、そして皮膚科医としての姿勢を示す論考は、学生だった私にとって新鮮であり、大きな示唆を与えてくれた。その出会いが、皮膚科医として歩む決意を固める契機となった。

それから43年。皮膚科医として臨床に立ち続ける中で、私は幸運にも本誌と深い関わりをもつことになった。長年にわたり編集責任者として本誌を支えてこられた西山茂夫先生、西岡清先生、斎藤隆三先生は、いずれも私にとって大切な恩師である。先生方が紡いできた誌面の伝統、穏やかな語り口、臨床の現場に寄り添う視点、そして皮膚科医としての基本を大切にする姿勢は、私にとって常に道標であった。

やがて私自身もエディターとして声をかけていただき、気がつけば15年ほどが経過した。それ以前から続けてきた「皮膚科のトリビア」の連載では、月に1度、臨床の現場で得た気づきや皮膚科学の歴史的背景を整理し、読者の皆様にお届けしてきた。短いコラムではあるが、日々の診療を振り返り、皮膚科医としての視点を再確認する貴重な時間でもあった。誌面を通じて読者の皆様と静かに対話しているような感覚があり、それは私にとって大きな励みとなった。

本誌はこれまで、臨床の現場で皮膚科医が直面する課題に対し、実践的で誠実な視点を提供し続けてきた。患者を中心に据え、皮膚科医としての基本を大切にする姿勢は、多くの読者にとって指針となり、私自身もその影響を受けてきた。編集に携わる中で、執筆者の思いを受け取り、読者にもっとも伝わる形に整えることのむずかしさと奥深さも学んだ。それは、患者の訴えを丁寧に聞き、必要な情報を整理して診療につなげる臨床の営みとも通じるものであり、雑誌編集は私にとって、臨床の延長線上にあるもう1つの学びの場であった。

今回のEditorialが、私にとって1つの節目となる見込みである。そう考えると、本誌から受けた影響、恩師の先生方から学んだこと、読者の皆様からいただいた言葉、そして編集部と誌面を作り続けた年月が、静かに思い出される。それらは、皮膚科医としての私の歩みを豊かにしてくれた、かけがえのない時間である。

最後に、本誌を支えてくださった読者の皆様、執筆者の先生方、そして編集部の皆様に、心より感謝申し上げます。『皮膚病診療』とともに歩んだ年月は、私にとってかけがえのない財産である。これまでいただいた多くの学びとご縁に深く感謝し、これからも大切にしていきたいと思う。